

奈良・平安・鎌倉時代の和文学作品における

感情形容詞の多義の実態について

安本真弓

一 はじめに

筆者は、安本真弓（二〇一八・二〇二〇）において、『日本古典対照分類語彙表（以下、『古典分類』と呼ぶ）を基盤とし、奈良・平安・鎌倉時代の和文学作品における感情形容詞の意味分類項目の設定とシソーラス作成を試みた。これは、『古典分類』が現代日本語

のシソーラスである『分類語彙表』の意味分類項目を原則踏襲したものであるため、その枠組みを古代日本語の有様にそって再構築し、より目的とする時代や文体、意味、品詞に即したシソーラス（意味分類）を作成する必要があると考えたからである。

具体的には、安本（二〇一八）では、『分類語彙表』や『古典分類』といった汎時的なシソーラスをもとに、感情形容詞に該当すると思われる「相の類」の「330 心」の下位項目として示された意味分類項目について、そこに挙げられた形容詞の意味を精査すること、各意味分類項目名の妥当性を検討した。なお、各語の意味の確認には、主に『角川古語大辞典』や『日本国語大辞典 第二版』などの辞書を利用している。その結果、意味分類項目名の追加・修正・削除を行い、奈良・平安・鎌倉時代の和文学作品における

感情形容詞という研究目的に即した意味分類項目を作成することができた。このことは、該当する感情形容詞の実態に即し、古代語に特徴的な意味であるなどの理由によりもれていたものの追加や、感情形容詞に限定したことによる、より具体的で分かりやすい名称への修正、古代語では該当語が見つからないものや感情とは言いにくいものの削除ができたという点で意義がある。

そして、安本（二〇二〇）では、安本（二〇一八）で設定した意味分類項目ごとに、奈良・平安・鎌倉時代の和文学作品において各項目に該当する感情形容詞の一覧と辞書的な意味をシソーラスとして示すことができた。

しかし、残された課題の一つとして、同一の語が複数の意味を持つ多義の問題がある。安本（二〇一八・二〇二〇）でも、多義に関して、語の複数の意味をどの程度認定するのか、認定した多義をどのように処理するのかについて検討する必要があることを述べた。そのうえで安本（二〇一八）では、多義語は、『古典分類』の項目ごとに、そこに挙げられている語の意味について、主として『角川古語大辞典』や『日本国語大辞典 第二版』などの辞書の記述と照らし合わせながら検討し、多義のどの意味がどの項目に該当するの

かを推測する方法をとっている。また、安本(二〇二〇)では、多義語の複数の意味の認定とその処理の仕方について述べたうえで、意味分類項目ごとに該当する語やどの意味が当てはまるのかという多義語の複数の意味の認定結果をソースラスとして示している。

だが、多義の問題は簡単に解決できるのではなく、安本(二〇一八・二〇二〇)では、「感情」という意味の中における多義については検討したが、「感情」に加え「感情」以外の意味を持つ多義語を対象とし、その「感情」以外の意味を考察することはできていない。しかし、『古典分類』が掲載する感情形容詞の中には、複数の意味分類項目が示された多義である語も多く、その中には「330心」以外の項目が示されているものもある。つまり「感情」とそれ以外の意味との組み合わせによる多義語も存在するのである。

そこで本稿では、安本(二〇二〇)のソースラスに掲載されている感情形容詞を対象とし、「感情」の意味のみを持つ語の有様やその特徴、「感情」に加え「感情」以外の意味を持つ多義のあり方、感情形容詞が併せ持つその他の意味について検討することにする。

二 安本(二〇一八・二〇二〇)での分析の観点について

また、安本(二〇一八・二〇二〇)では、これまでのソースラス作成の過程で、多義に加え、「感情」ということの内実についても、以下の(1)~(3)の三つの観点から考察を行っている。なお、(2)は安本(二〇一八)でも言及している観点だが、(1)(3)は基本的に安本(二〇二〇)で述べたものである。

(1)「感情」とは、感情の持ち主(以下、感情主とする)がある対象(出来事なども含む)に接し、その有様に触発された結果、その

対象に対して抱くものであると考えられる。つまり、感情を生じさせるきっかけとなる何らかの対象が存在するのであり、これを「感情を抱く誘因」とする。そのうえで、「感情」は、感情を抱く誘因である対象を強く意識し、その形容を行っているかどうかといった対象との関わりという点から、大きく二種類に区分できると考えた。一つ目の区分は、①出来事などによって生じた、喜怒哀楽のような、感情主のある瞬間の自発的で主観的な「感情」であり、対象を強く意識したものではないもの。二つ目は、②感情主の主観的な

「感情」に基づくが、対象を強く意識し、その形容を行っているものである。例えば、①には「うれし」や「かなし」、②には「このまし」や「にくし」が当てはまる。なお、②の対象に対する形容も、あくまでも感情主の主観的な観点によるものであると考えられ、この①②種類の「感情」は、抱いた気持ちや感情主の主観を基盤とする点で共通している。①②の違いは、感情主と対象との関わり方であり、①は対象がどうであるかを感情主が形容するというよりは、対象はあくまでも感情の誘因にすぎないが、②は対象(人物であることが多い)がどのような様であるかを感情主が主観的に判断し形容するといった側面も含まれている。従来より形容詞の意味分類の種類として「感情」と「評価」といった区分が認められているが、他者の性状を表すという「評価」に近い側面があれば②になる。

(2)さらに、意味分類項目の内容を検討する際に、快・不快のような「感情」のあり方を「プラス」「マイナス」という対になる概念として導入している。また、安本(二〇二〇)では、それらについてどのように考えるのかを説明したうえで、どのような基準で各「感情」が「プラス」と「マイナス」に振り分けられているのか

についても、(1)の④⑤ごとに説明している。加えて、安本(二〇一八)から一貫して、「感情」はできる限り対として考えるべきだと判断し、意味分類項目ごとに「気楽」と「遠慮」、「期待」と「失望」など、対になる「プラス」「マイナス」の概念の有無を考慮し、対が設定できる場合は可能な限りそのようにしている。

④での「プラス」の感情とは、感情主が「嬉しい」や「楽しい」などの心地よい感情を抱くことである。一方の「マイナス」は、感情主が「つらい」や「怖い」などの不快で嫌な感情を抱くことである。また⑤は、対象を強く意識し、対象の有様の形容を行っている感情であるため、この場合は対象に対する感情が好ましか否かといった観点から「プラス」と「マイナス」を判断している。つまり、感情主が対象の態度や有様に好印象を抱いた場合が「プラス」、対象に嫌悪感などを持った場合が「マイナス」になる。このように、基本的には一般的な「感情」に対するイメージ通りに「プラス」と「マイナス」が設定されているが、中には「プラス」と「マイナス」に振り分ける基準が分かりにくいものがあり、それらについては安本(二〇二〇)で述べている。また、同一の語や同一名称の意味分類項目が「プラス」と「マイナス」の両方を持つ場合があることや、対になる感情との関係から「プラス」と「マイナス」のどちらであるのかを考えたものもあることについても説明している。

(3)また、以上の「感情」における(1)主観性と対象、(2)「プラス」と「マイナス」に加え、「感覚形容詞」と「感情形容詞」の観点を踏まえたうえで、各「感情」がどのような類似関係にあり、どのように異なるのかという各意味分類の関係性についても④⑤ごとに整理した。ただし、④と⑤に厳密に区分しにくいものもあるが、安本

(二〇二〇)では、原則『古典分類』の同一の分類番号(330「心」の下位項目)は④と⑤に分断させず(「33041」「33042」のみ例外)、また対になる感情の有様などを考慮したうえで、相対的に⑤の要素が強いものは⑤にしている。

この④⑤ごとに類似する感情をまとめ、その整理した区分ごとに、「感情」の内容と「プラス」「マイナス」別の該当する意味分類項目、対のあり方を示したものが表1である。表1では、対になっている「プラス」と「マイナス」の「感情」は□で囲って示している。

表1 類似する感情ごとの「感情」内容と該当する意味分類項目

④【感覚形容詞】

身体感覚を伴うものや疲労感、睡眠に対する欲求を表すもの

「プラス」― なし

「マイナス」― 「感覚」「疲労」「睡眠」

【感情形容詞】

(a)とつさの事態に対して、感嘆したり、驚いたりする感情

「プラス」― 「感嘆」「驚愕」

「マイナス」― 「感嘆」「驚愕」

(b)直面した事態に対し、快さや喜び、満足感を感じたり、気にいらない、もの足りない、苦しい、悲しい、つらいなどと思ったりする感情

「プラス」― 「快」

「マイナス」― 「不快」

「プラス」― 「喜び」「満足」

「マイナス」― 「憂い」「不満足」「苦悩」「悲哀」「心痛」

(c)自分のことを誇りに思ったり、期待したり、恥だと感じたり、失望したりする感情。また、自分が望んでいることや実行したい行動を表す感情。

「プラス」― 「誇り」、 「期待」、 「好奇心」

「マイナス」― 「恥」、 「失望」

(d) 事態や対象に対し、安心だ、気楽だと思ったり、気がかりだ、気が引ける、悔しい、落ち着かない、さびしいなどと思ったりする感情

「プラス」― 「安心」、 「気楽」

「マイナス」― 「不安」、 「遠慮」、 「悔恨」、 「焦燥」、 「寂寥」

(e) 対象がその価値にふさわしい扱い方がされていないことに対して、もったいなく思ったり、対象のねうちがいかされないことを残念に思ったりする感情

「プラス」― 「もったいない」

「マイナス」― 「惜しい」

(f) 対象に対し、おそれ敬う気持ちや恐ろしさ、怒りを感じる感情

「プラス」― 「畏怖」

「マイナス」― 「恐怖」、 「怒り」

⑧ 感情形容詞

(g) 対象に対し、好ましさやいとしさ、同情や憧れの気持ちを抱いたり、

いとわしさや憎さ、軽んじる気持ちや妬ましさを抱いたりする感情

「プラス」― 「好感」、 「愛情」、 「同情」、 「羨望」

「マイナス」― 「嫌悪」、 「憎悪」、 「軽蔑」、 「嫉妬」

(h) 対象に対し、すぐれていると思ったり、感謝の気持ちや心強さを感じたり、恐れつしむべきだと思ったりする感情

「プラス」― 「敬意」、 「感謝」、 「信頼」

「マイナス」― 「恐縮」

(i) 対象の珍しさに心が惹かれたり、神秘的だと思ったり、風変わりである、いぶかしいと思ったりする感情

「プラス」― 「稀有」、 「不思議」

「マイナス」― 「稀有」、 「不審」

(j) 対象の好ましい側面を見つたり、それを褒めたたえたり、好ましくない側面を見つたり、それを批判したりする感情

「プラス」― 「判断」、 「高評価(賞嘆)」

「マイナス」― 「判断」、 「低評価」

(k) 対象の自信を持っている様、信念を持っている様、労を惜しまない様を感じたり、反省している様、耐え難く思っている様を感じたりする感情

「プラス」― 「自信」、 「信念」、 「努力」

「マイナス」― 「反省」、 「耐え難い」

(l) 対象の性質や一時的な状態、日ごろの行いを好ましく思ったり、態度を好ましく思ったり、逆に好ましくないと思ったりする感情

「プラス」― 「他者の心(性状)」、 「態度」

「マイナス」― 「他者の心(性状)」、 「態度」

三 安本(二〇一八・二〇二〇)で対象とした感情形容詞の

多義の状況

以上の観点を踏まえて、安本(二〇一八)では、『古典分類』「相の類」の「330 心」の項目に掲載され、感情形容詞であると認定した二九二語と筆者が追加した感情形容詞四〇語の計三三二語の奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における感情形容詞を対象とした意味分類項目を設定し、安本(二〇二〇)では、各項目ごとに該当する感情形容詞とその意味を示したシソーラスを作成している。

本稿では、この安本(二〇一八・二〇二〇)で対象とした感情形容詞がどの程度「感情」以外の意味を持っているのか、つまり多義として存在しているのかを、『古典分類』で示された各語の意味分類のあり方をもとに検討する。ただし、安本(二〇一八)で筆者が追加した感情形容詞四〇語のうち、二九語は『古典分類』に掲載さ

れていない語であるため、本稿ではこの二九語は対象外とする。つまり、本稿で対象とする語は、異なり語数において三〇三語になる。

まず、この三〇三語において、『古典分類』がどの意味分類項目に該当すると示しているのかを整理する。すると、三〇三語のうちの一〇八語(約六九%)は、『古典分類』「相の類」の「33 精神及び行為」の「330 心」の項目のみに示されていた(ただし中には、「330 心」の中で複数の項目に示されている語もある)。つまり、この二〇八語は基本的に「感情」の意味のみを持つ語であると考えられ、これらの形容詞を五十音順に示すと、表2になる。

表2 『古典分類』「相の類」の「330 心」にだけ示された「感情」の意味のみを持つ語

あからし、あきたし、あづきなし、あまえいたし、あやなし、ありがほし、いきうし、いぎたなし、いきづかし、いきづくし、いさまし、いそし、いたづがはし、いたはし(痛)、いたぶらし、いたまし、いとほし、いとほし、いねぶたし、いぶかし、いへこひし、いまはし、いらががまし、うし、うしろめたし、うしろめたなし、うたがはし、うたてし、うたてし(シク适)、うつし、うとまし、うらがなし、うらごひし、うらさびし、うらめし、うらもとなし、うらやまし、うれし、うれたし、うれはし、おきうし、おだし、おぼつかなし、おほめかし、おほやけはらだたし、おもはし、おもばゆし、おもひがなし、おもひぐるし、おもひなやまし、おもほし、かがやかし、かけかけし、かたくるし、かたじけなし、かたはらいたし、かなし、かはゆし、かひがひし、かへまうし、かへりうし、かゆし、ききぐるし、ききよし、きほし、くしいたし、くすし、くすばし、くただだし、くつろぎがま

し、くふし、くやし、くんじいたし、けうとし、けおそろし、けぎよし、けしきはまし、けすさまじ、けなつかし、けにくし、けぶたし、けむつかし、ころがなし、ころぐし、ころぐるし、ころづよし、ころほそし、ころもとなし、こたへまうし、こたませまうし、このまし、こひし、こふし、こほし、さうざうし、さびし、さぶし、したはし、したやすし、したゑまし、しふねし、しらじらし、しりひかし、しるし、すかなし、すぎうし、すずろはし、そねまし、そらおそろし、そらはづかし、たづがなし、たづたづし、つつまし、つなしくし、つぶらはし、つべたまし、つらし、とこなつかし、なげかし、なまいとほし、なまいどまし、なまうしろめたし、なまうらめし、なまおそろし、なまかたはらいたし、なまくちをし、なまくるし、なまけやけし、なまころぐるし、なますさまし、なまにくし、なまねたし、なまはしたなし、なまはらだたし、なままばゆし、なまむつかし、なまめさまし、なまものうし、なまやすし、なまわづらはし、なみだぐまし、にががし、にくし、につくし、ねがはし、ねたし、ねつたし、ねぶたし、はし、はぢがまし、はらだたし、ふくつけし、ほけほけし、ほこらし、ほし、ほればれし、まうらがなし、まかなし、みえぐるし、みがほし、みせまうし、みちみちし、みほし、みまうし、みやうもんぐるし、むがし、むくむくし、めぐし、もどかし、ものうし、ものうらめし、ものうるはし、ものおそろし、ものおもしろし、ものおもはし、ものがなし、ものくるはし、ものぐるほし、ものころほそし、ものこのまし、ものさびし、ものし、ものすさまじ、ものたのもし、ものつつまし、ものなげかし、ものはかばかし、ものはづかし、ものむつかし、ものゆかし、ものわびし、ものをかし、やすけなし、やまし、ややまし、ゆかし、よろこばし、らうたし、わざとがまし、わざとなし、わざとめかし、わざわざし、われたけし、ゑまし、ゑまはし、をががまし、をし、をしけし

三― 「感情」の意味のみを持つ語の特徴

では、この表2の「感情」の意味のみを持つ語に何か特徴は見られるのであろうか。この点を次の表3を用いて検討する。安本(二〇一八)で示した意味分類項目ごとに、各意味分類項目に整理されている語が具体的にどのような類似する意味のまとまりであるのか、他とはどのように異なるのかなどの特徴や、各意味分類項目に該当する語の総数、「感情」の意味のみを持つ語の数、「感情」以外の意味も併せ持つ多義の語の数、各意味分類項目の総数に対する「感情」の意味のみを持つ語の割合を示したものが表3である。なお、表3は、安本(二〇二〇)のシソーラスで示した語から『古典分類』に掲載されていない語を除外したうえで作成している。

また、二節の(1)で述べたが、安本(二〇二〇)では、「感情」を④喜怒哀楽のような、感情主のある瞬間の自発的で主観的な「感情」であり、対象を強く意識したものではないもの、⑤感情主の主観的な「感情」に基づくが、対象を強く意識し、その形容を行っているものの二種類に大別しており、加えて感覚形容詞も見られることから、表3では、「感情」の種類を「感覚形容詞」「感情形容詞」①「感情形容詞」②の三種類に分けて示している。

さらに、安本(二〇二〇)では、類似する感情を表1のように整理し、感情形容詞①を感情主の主観性の強さのあり方と特定の対象がどの程度感情の誘因として意識されているかによって段階的に(a)～(f)に分けている。(a)や(b)は主観性が高く、特定の対象を強く意識していないもの、(d)は対象を意識する場合もあればそうでない場合もあるもの、(e)や(f)は感情の誘因として特定の対象が意識されているものである。また、感情形容詞②についても、感情主の主観に基

づいた対象の形容が、より対象の長期的・恒常的な性質を表しているかどうかによって段階的に(g)～(l)に分けており、(g)(h)は感情主が抱いた感情によって、その場での対象の有様が推測できるもの、(k)や(l)は長期的な対象の性質であると感情主が感じたものである。この点についても、表3では「類似する感情のまとまり」として示している。

加えて表3では、「意味分類項目」において、「マイナス」の感情である項目名は白字で示し、「プラス」の感情と区別できるようにしている。

また表3では、最後に「合計(延べ語数)」を示しているが、多義であることにより複数の意味分類項目に配置された語もあるため、各意味分類項目に該当する語の合計数(延べ語数)は三七九語となっている。そのうち「感情」の意味のみを持つ語の合計数(延べ語数)は二三九語、多義の語の合計数(延べ語数)は一四〇語である。

この表3をもとに、意味分類項目ごとの「感情」の意味のみを持つ語や多義の語のあり方を見る。まず、表3の各意味分類項目の総数に対する「感情」の意味のみを持つ語の割合に注目する。先に述べた通り、感情形容詞三〇三語中の二〇八語、約六九%の語(表2参照)が「感情」の意味のみを持つため(ただし、表3の合計(延べ語数)では、全体の二三九語、約六三%の割合の語が「感情」の意味のみを持つ語になる)、表3では、「感情」の意味のみを持つ語の割合が七〇%を超える意味分類項目の割合の部分に網掛けを施している。

この網掛けが付された割合が高いもの(七〇%以上)を見ると、

表3 奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における、各意味分類項目ごとの「感情」の意味のみを持つ語、多義の語のあり方

「感情」の種類	類似する感情のまとめ	【分類番号】	【意味分類項目】	【特徴】	各意味分類項目に該当する語(総数)	「感情」の意味のみを持つ語	多義の語	総数に対する「感情」の意味のみを持つ語の割合			
感情形容詞		3.3001	感覚	身体感覚を伴うもの 「感情形容詞」に該当	5	2	3	40%	56%		
		3.3003	疲労	疲労感。 「感情形容詞」に該当	1	0	1	0%			
		3.3003	睡眠	睡眠に対する欲求。 「感情形容詞」に該当	3	3	0	100%			
感情形容詞①	(a)	3.3002	驚愕	好ましいことに接し、意外であると驚く気持ち	1	0	1	0%	33%		
		3.3002	驚愕	驚きあきれる、ひやひやする気持ち	2	1	1	50%			
	(b)	3.3011	快	視覚や聴覚などの身体感覚を通じ感じる快さ、清潔感から感じる快さ	9	4	5	44%	66%		
		3.3011	不快	気に入らない、興ざめである気持ち	11	7	4	64%			
		3.3011	喜び	喜び、満足な気持ち	6	4	2	67%			
		3.3011	憂い	具体的な語としては、「3.3014 苦惱・悲哀・心痛」が当てはまる	1	0	1	0%			
		3.3013	不満足	思い通りにならなくて、不満やもの足りなさなどが感じられる気持ち	9	4	5	44%			
		3.3014	苦惱	対処するの困難なことがあり、苦しみ、悩むこと、面倒に思うこと。悩みによって、身体的にも不都合が生じている場合がある	23	12	11	52%			
		3.3014	悲哀	嘆かわしく、悲しい気持ち	14	13	1	93%			
		3.3014	心痛	つらく、気がふさぐ気持ち。あるいは、何か行動を起こすのがつらい心情。 「不満足」や「苦惱」「悲哀」との違いは、「不満足」は思い通りにならなくて、不満やもの足りなさなどが感じられる様、「苦惱」は何か対処に困ることがある様、「悲哀」は嘆いたり、ため息が出るような様、「心痛」は気がふさいだり、何か行動を起こすのがつらい様といったような観点で区別した。しかし、必ずしも厳密に分けられるわけではない	32	25	7	78%			
		(c)	3.3041	誇り	光栄、名誉に思う気持ち	2	1	1		50%	71%
			3.3041	恥	恥ずかしく、きまりが悪い気持ち	20	14	6		70%	
	3.3042		期待	そうありたいと思う気持ち	4	3	1	75%			
	3.3042		失望	対象のあり方を見て、好ましく感じず、残念に思う気持ち。「悔恨」と似ているが、「悔恨」が自己の行為などを悔いているのに対し、「失望」は対象の有様につながりしている	4	1	3	25%			
	3.3042		欲望	〇〇したいという欲望	2	2	0	100%			
3.3042	好奇心		人間の五感(視・聴・嗅・味・触)を使って行動をしたいという気持ち	6	6	0	100%				
(d)	3.3013	安心	安心、心丈夫、心おだやかな気持ち	11	6	5	55%	69%			
	3.3013	不安	気がかりだ、落ち着かない、心おだやかでない気持ち	18	14	4	78%				
	3.3041	気楽	遠慮しないでよい気持ち	1	0	1	0%				
	3.3041	遠慮	気が引ける心情。「古典分類」で挙げられた全ての語が「恥」の意味も持つが、違いは「遠慮」は特定の対象を意識し、それと自分を比較して気がねしていること。「恥」は感情主が対象と自分を比較する意識が相対的に低い	6	3	3	50%				
	3.3012	悔恨	「悔恨」という項目名だが、残念だ、がっかりだという気持ちの語も含まれている	11	8	3	73%				
	3.3013	焦燥	落ち着かない気持ち	3	2	1	67%				
	3.3013	寂寥	人の気配がなく心細い、心ざびしいという気持ち	5	5	0	100%				
(e)	3.3012	もったいない	その価値にふさわしい扱い方をしないでおくのが残念だ、心ひかれて手はなしくい心情	3	2	1	67%	80%			
	3.3012	惜しい	思うようにならなかったり、物事のねうちが生かされなかったりするのを残念に思う心情	2	2	0	100%				
(f)	3.3012	畏怖	おそれ敬う気持ち	2	0	2	0%	61%			
	3.3012	恐怖	恐ろしい、無気味だ、うす気味悪いという気持ち	15	10	5	67%				
	3.3012	怒り	しゃくにさわる、腹立たしい気持ち	6	4	2	67%				

「感情」の種類	類似する感情のまとめ	【分類番号】	【意味分類項目】	【特徴】	各意味分類項目に該当する語(総数)	「感情」の意味のみを持つ語	多義の語	総数に対する「感情」の割合のみを持つ語の割合	
感情形容詞⑥	(g)	3.3020	好感	好ましく、親しみやすい気持ち	11	8	3	73%	
		3.3020	嫌悪	いやだ、いとわしいという気持ち。「不快」との違いは、「不快」が対象の形容までは基本的に含意しないのに対し、「嫌悪」は対象がそう感じるものであることを表す度合いが相対的に高い	15	10	5	67%	
		3.3020	愛情	いとしい、慕わしいという気持ち	19	15	4	79%	
		3.3020	憎悪	憎いという気持ち	6	6	0	100%	
		3.3020	同情	気の毒である、ふびんであるという気持ち	7	6	1	86%	
		3.3020	軽蔑	軽んじる気持ち	4	1	3	25%	
		3.3020	羨望	自分よりすぐれているものに憧れ、そうありたいと願う気持ち	2	1	1	50%	
	(h)	3.3020	嫉妬	自分より恵まれているように見えるものに対し、妬ましく感じる気持ち	5	5	0	100%	
		3.3021	敬意	尊い、すぐれていると感じる気持ち	6	1	5	17%	
		3.3021	恐縮	高貴なものが、いやしいものに接していることがもったいなく、恐れつつしむべきであるという気持ち。「畏怖」はおそれ敬う気持ちだが、「恐縮」はそのような対象に対し、自分の身を制する感情を抱くことが特徴	3	1	2	33%	
		3.3021	感謝	ありがたうれいしい気持ち	1	1	0	100%	
	(i)	3.3021	信頼	心強いという気持ち	1	0	1	0%	
		3.3042	稀有	珍しくて心がひかれる気持ち	2	0	2	0%	
		3.3042	稀有	風変わりだと感じる気持ち	1	0	1	0%	
		3.3068	不思議	神秘的だと思う気持ち	3	2	1	67%	
	(j)	3.3068	不審	はっきりとつかめない状態をいぶかしく思う気持ち	4	2	2	50%	
		3.3066	判断	対象の好ましい側面を見つける	2	2	0	100%	
		3.3066	判断	対象の好ましくない側面を見つける	3	1	2	33%	
		3.3066	高評価(賞嘆)	対象の好ましい側面を褒めたたえている	4	1	3	25%	
	(k)	3.3066	低評価	対象の好ましくない側面を批判している	7	1	6	14%	
		3.3041	自信	対象自体は自信をもっており、その点で「プラス」の感情である。しかし、感情主から見れば、好感は持たれていない	2	1	1	50%	
		3.3041	反省	感情主が好ましくないと感じると同時に、対象自身も反省をしており、その点でも「マイナス」の感情である	1	1	0	100%	
		3.3040	信念	対象自体は信念をもっており、その点で「プラス」の感情である。しかし、「かけかけし②」や「しふねし」は感情主から見れば、必ずしも快く感じない場合もありそうである	4	3	1	75%	
	(l)	3.3040	努力	労を惜しまないさまを称える気持ち	2	2	0	100%	
		3.3040	耐え難い	堪えがたい感じがする気持ち	3	0	3	0%	
		3.3000	他者の心(性状)	好ましい他者の性質や一時的な状態あるいは日ごろの有様を表す	2	2	0	100%	
		3.3000	他者の心(性状)	好ましくない他者の性質や一時的な状態あるいは日ごろの有様を表す	5	1	4	20%	
	(l)	3.3030	態度	他者の態度(言動)についての「プラス」の形容。安本(2018)からの修正点として、「わざとなし」を「マイナス」から「プラス」に変更	5	2	3	40%	
		3.3030	態度	他者の態度(言動)についての「マイナス」の形容	11	5	6	45%	
	合計(延べ語数)					379	239	140	
						100%	63%	37%	

その中には該当する全ての語が「感情」の意味のみを持つ意味分類項目もあることに気がつく。感覺形容詞では「睡眠」、感情形容詞④では「欲望」「好奇心」「寂寥」「惜しい」、感情形容詞⑤では「嫉妬」「感謝」「判断」「反省」「努力」「他者の心(性)」が、「判断」と「他者の心(性)」は、同一名称で「プラス」と「マイナス」の両方の意味分類項目を持つが、どちらも「プラス」の方だけが「感情」の意味のみを持つ語の割合が一〇〇%であった。

では、このような「感情」の意味のみを持つ語の割合が高い意味分類項目に何か特徴が見られるのであろうか。表3の「類似する感情のまとまり」ごとに「感情」の意味のみを持つ語の割合を見ると、感情形容詞④では、(b)が六六%、(c)が七一%、(d)が六九%、(e)が八〇%であり、(b)から(e)にかけて次第に割合が高くなっていく傾向が見られる(ただし、(c)↓(d)は異なる)。また(b)↖(e)は全て、表3「合計(延べ語数)」の「感情」の意味のみを持つ語の割合である六三%よりも高くなっており、平均以上であることが分かる。一方、感情形容詞⑤では、(g)のみが七五%と全体の割合よりも高く、その他は二七%から五八%と低くなっている。感情形容詞④と⑤の全体的な「感情」の意味のみを持つ語の割合を見ても、④が六七%、⑤が七七%と④の方が高い。

以上のことから、(g)を除くと、感情形容詞⑤よりも感情形容詞④の方に、「感情」の意味のみを持つ語の割合が高い意味分類項目がまとまって見られ、特に感情形容詞④の(b)↖(e)において、「感情」の意味のみを持つ語が多く存在することが分かる。

この点を分析すると、④の(b)↖(e)の違いは、対象に対する意識の

あり方の差であり、(b)は特定の対象を強く意識したものではないが、(c)は自己が念頭にあるもの、(d)は対象を意識する場合もあればそうでない場合もあるもの、(e)は特定の対象を念頭においたものがある。つまり、自己や特定の対象を意識し念頭においたものの方が、「感情」の意味のみを持つ語の割合が高い傾向にあると言える。

また、二節の(1)で述べたが、感情形容詞④⑤は抱いた気持ちを感じ主の主観に基づいている点で共通するが、両者は対象がどのような様であるかを感情主が主観的に判断し形容するか否かという点で違いが見られる。感情形容詞④では、対象はその形容が表されるというよりも、あくまでも感情の誘因にすぎない。一方感情形容詞⑤では、対象は強く意識され、形容されることが前提となっているものである。その⑤において、「感情」の意味のみを持つ語の割合が唯一高いのが(g)であり、これは⑤の中で最も④に近いものである。(g)は対象の形容を表すと言っても、感情主が抱いた感情によってその場での対象の有様が推測できるものであり、対象の長期的で恒常的な性質を表しているわけではない。

これらのことから考えると、④の(b)↖(e)自己や特定の対象を意識し念頭においているが対象の形容までは表さない語、もしくは、⑤の(g)対象の形容を表すにしてもその場での対象の有様を示す語の方が、「感情」の意味を持ち続け、多義になりにくいということではないだろうか。これらの意味分類項目には、対象を意識し、かつある瞬間の感情を表しているという共通点が見られることから、自己や特定の対象に対し、その場での瞬間的な感情主の心情を表すことに主眼が置かれたものの方が、「感情」の意味のみを持ちやすいということであると考えられる。

先ほどの「感情」の意味のみを持つ語の割合が一〇〇%の意味分類項目を再度見ても、感情形容詞④で該当するものは、(c)(d)(e)に属す意味分類項目である。ただし感情形容詞⑥で該当するものについては、(g)以外にも(h)と(i)と(j)に点在しており、傾向が見えにくい。この点は、(g)を除くと異なり語数が二以下の意味分類項目であり、この異なり語数の少なさが原因であろうと思われるが、今後さらに検討したい。

次に、感情形容詞が「感情」以外の意味を持ち、多義になっていく過程についても検討する。まず、何が「感情」の中心的な意味であるのかということに関しては、感情形容詞④の方が⑥よりも「感情」の意味のみを持つ語の割合が高いことから、④の対象の形容を表さないとすることが「感情」の原義により近いものであると推論できるのではないだろうか。「感情」と関連が深い「評価」形容詞も踏まえて検討すると、感情形容詞④の対象の形容を表さない(対象がどのような様であるかまでは含意しない)ということが「感情」の本質に最も近く、感情形容詞⑥のある瞬間の一次的な対象の有様を示すものがそれに続き、その後、感情主が対象の長期的な性質であると感じたことを表す感情形容詞⑥、対象の客観的で恒常的な性質を表す評価形容詞へと意味の派生が続いていくと考えられる。そして、原義に近い感情形容詞④や感情形容詞⑥の一次的な対象の有様を示すものが、「感情」の意味を保持しやすく、多義になりやすいのである。

なお、この「感情」の意味のみを持つという点を、二節の(2)「感情」の「プラス」「マイナス」の側面に注目して検討すると、「プラス」では延べ語数二二〇語中の七五語(約六三%)、「マイナス」では二

五九語中の一六四語(約六三%)が「感情」の意味のみを持つ語であった。つまり、「プラス」と「マイナス」において、「感情」の意味のみを持つ語の割合はほぼ同じであり、違いが見られない。このことから、「プラス」と「マイナス」という側面は、「感情」の意味のみを持つのか、多義であるのかということに関して、大きな因果関係は見られないということであると考えられる。

三―二 多義語の特徴

前節では、「感情」の意味のみを持つ語の特徴について見たが、一方で、表2以外の三〇三語中の九五語は、多義であるということになる。そこで次に、多義語の特徴について検討する。まずは、多義の語がどの程度意味の種類を持つのかについて検討すると、九五語のうち二語は、「感情」以外の意味を四種類持つ多義語であった。その他については、「感情」以外の意味を三種類持つ多義語が一〇語、「感情」以外の意味を二種類持つ多義語が二八語、「感情」以外の意味を一種類持つ多義語が五五語である。つまり、九五語中の四〇語(四二%)は、「感情」を含めて三種類以上の意味を持つ多義語であるということになる。

では、これら九五語は「感情」以外のどのような意味を持っているのであるか。『古典分類』をもとに、「感情」以外の意味を持つ多義の語が属す意味分類項目について、異なり語数が多い順に示したものが表4である。

この表4から、多義語を持つ「感情」以外の意味の上位として、「趣・調子」「良不良・適不適」「程度」「待遇・礼など」「難易・安危」「醜」が挙げられることが分かる。

表4 多義の語が属す意味分類項目

31302 (趣・調子)	14	あたらし、いたし、うつくし、おもだたし、か しこし、くちをし、くるし、すごし、すさま じ、なまをかし、はづかし、まばゆし、ゆゆ し、をかし
31332 (良不良・適不適)	12	あいなし、あし、あぢきなし、おほけなし、け し、たけし、なつかし、まさなし、めでたし、 ゆたけし、よわし、わるし
31920 (程度)	10	あいなし、あさまし、いたし、いらなし、か しこし、からし、けし、こちたし、ゆゆし、わり なし
33680 (待遇・礼など)	10	あなづらはし、いつくし、うるさし、かたし、 つれなし、つれもなし、はしたなし、めざま し、ものはしたなし、やさし
31346 (難易・安危)	9	あぢきなし、あやふし、ありがたし、かたし、 からし、たへがたし、やすし、わずれがたし、 わりなし
31345 (美醜)	7	いふせし、うつくし、うるはし、はえばえし、 みぐるし、むつかし、やさし
33790 (貧富)	6	たのし、たのもし、ともし、にぎはし、ゆた けし、わびし
33420 (人柄)	5	あはし、いちはやし、うもれいたし、うひうひ し、のどけし
33421 (才能)	5	あし、おほほし、かしこし、しれじれし、たゆ し
31331 (特徴)	4	あやし、ありがたし、けし、めづらし
31400 (力)	4	すさまじ、たけし、はしたなし、よわし
31915 (寒暖)	4	あつかはし、すごし、すさまじ、すずし
33310 (人生・禍福)	4	いつくし、いまいまし、まがまがし、ゆゆし
33410 (身上)	4	あやし、たふとし、はかばかし、やんごとなし
31230 (必然性)	3	あへなし、やんごとなし、わりなし
31910 (多少)	3	うすし、かたし、ともし
31911 (長短・高低・深淺・ 厚薄・遠近)	3	あつし、うすし、けちかし
33300 (文化・歴史・風俗)	3	おもしろし、なまめかし、むくつけし
35710 (生理・病気など)	3	なやまし、よわし、わづらはし
31130 (異同・類似)	2	おほし、まぎらはし
31200 (存在)	2	はかなし、ものはかなし
33320 (労働・作業・休暇)	2	いそがし、まぎらはし
33430 (行為・活動)	2	おぞし、たけし
33610 (公式・公平)	2	うるはし、はればれし
33710 (経済・収支)	2	いたはし(労)、たふとし
35050 (味)	2	からし、にがし
35150 (気象)	2	のどけし、はればれし
31030 (真偽・是非)	1	うるはし
31110 (関係)	1	つれもなし
31113 (理由・目的・証拠)	1	わりなし
31341 (弛緩・粗密・繁簡)	1	わづらはし
31500 (作用・変化)	1	つれなし
31510 (動き)	1	すがすがし
31520 (進行・過程・経由)	1	はかばかし
31584 (限定・優劣)	1	はかなし
31600 (時間)	1	はかなし
31660 (新旧・遅速)	1	うひうひし
31800 (形)	1	いらなし
31912 (広狭・大小)	1	ゆたけし
31913 (速度)	1	いちはやし
33100 (言語活動)	1	こちたし
33422 (威厳・行儀・品行)	1	おそろし
33500 (交わり)	1	むつまじ
35010 (光)	1	さやけし
35030 (音)	1	さやけし
35060 (材質)	1	かたし
35600 (身体)	1	なまめかし

最も多い「趣・調子」については、「古典分類」がこの項目で挙げる全一七語のうちの一四語が「感情」と共通しており、非常に「感情」と近い意味分類項目であることが分かる。二番目に多い「良不良・適不適」は、特に「良不良」において「よし」や「わるし」などの評価形容詞が含まれていることが特徴的である。前節で述べたが、「評価」は「感情」と意味が連続していると考えることができ、だからこそ「評価」の意味も併せ持つ感情形容詞が多いのである。三番目の「程度」については、「古典分類」がこの項目で挙げている全一七語のうちの一〇語が「感情」と共通している。形容詞の中に程度副詞になるものが存在することは従来から指摘されているが、「感情」についてもその傾向がある程度見られるということ

であろう。四番目以降の「待遇・礼など」「難易・安危」「美醜」については、いずれも主体が対象の有様を主観的に判断する要素が含まれており、その点で「感情」と共通する部分を持ち、多義となっているのだと考えられる。

以上のことから、「感情」とそれ以外の意味を併せ持つ多義になりやすい語の特徴として、一つには、「趣」や「難易・安危」「美醜」のような、対象の有様に対し、主体がどう判断したのかを表すものが多いということが言えるだろう。これらは、「感情」が「感情主の主観に基づく」ことが前提であるように、個人によって感じ方に差があるものであり、その点で「感情」と関わりを持ちやすいのだと考えられる。

二つ目として、「不良」のような評価形容詞と感情形容詞との関わりが挙げられる。「感情」と「評価」の違いは、「評価」が対象への形容が一個人としての判断だけではなく、感情主も含めて一般大衆がこのように感じているという大多数の意見として表されているのに対し、「感情」は一個人の判断として表出されている。しかし、一個人の判断が多くの人と共通する（共感を持つ）ものであった場合、大多数の意見として一般化することもあり、このような点から「感情」と「評価」を併せ持つ多義語が生じるのであると考えられる。

三つ目は、「感情」と「程度」の関係である。例えば「わりなし」という語は「どうしていいかわからない。困ったことである」という「苦悩」を表す感情の意味を持つが、このような苦悩に対しその程度に注目すると、「どうしようもないほどである。はなはだしい」といったような意味に変化する。このような多義のあり方は、語の中心的な意味とそこから派生する周辺の意味として類型可能な意味変化の一つであると考えられ、今後より検討する必要がある。

四 おわりに

本稿では、安本（二〇二〇）で作成した、奈良・平安・鎌倉時代の和文学作品における感情形容詞のシソーラスに掲載され、『古典分類』において意味分類項目が示されている語を対象とし、その多義の実態について検討した。

このことにより、「感情」の意味のみを持つ語がどの程度あり、それらにどのような特徴が見られるのか。また、どの程度の感情形容詞が「感情」以外の意味を併せ持ち、また一語が何種類くらゐの

意味を持つのか。「感情」以外の意味を併せ持つ多義の語が属す意味分類項目や、どのような語が「感情」以外の意味を持つ多義になりやすいのか、などのことが明らかになった。

しかし、「感情」の意味のみを持ちやすいものの特徴として、「自己や特定の対象を意識し、その場での感情主の瞬間的な心情を表すものが多い」ということを本稿で述べたが、なぜこのような特徴を持つのかという点や、多義語の中心的意味をどのように考えるか、多義語における「感情」と「感情」以外の意味を派生させる過程の類型化などについては、本稿では検討することができなかった。また、各語の詳細については、実際の用例を検討する必要がある。今後は用例を見ながら、延べ語数の状況も考慮し、「感情」の特徴の要因や、中心的意味と派生のあり方などといった多義の性質について、綿密に考察したいと考える。

さらに、「感情」だけではなく、形容詞全体のシソーラスを完成させるためには、「評価」や「状態」などの他の形容詞の意味分類項目も設定し、形容詞全体の整合性を見る必要がある。まずは、奈良・平安・鎌倉時代の和文学作品における形容詞全体のシソーラス作成を目指していきたい。

参考文献

国立国語研究所編（二〇〇四）『分類語彙表―増補改訂版』大日本

図書

宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉編（二〇一四）『日本古典

対照分類語彙表』笠間書院

安本真弓（二〇一八）『感情形容詞の意味分類―日本古典対照分

類語彙表』を基盤として」『国語学研究』五七

安本真弓（二〇二〇）「奈良・平安・鎌倉時代の和文作品における
感情形容詞の意味分類とシソーラス」『国語学研究』五九

（やすもと・まゆみ）